【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究（近代）

深津謙一郎

前回（『表現研究』103号）は原卓史による2013年～15年度のこの分野の動向紹介であった。そこで今回は、2016年以降の動向を紹介する。

最初に、日本近代文学会（編）『日本近代文学研究の方法』（ひつじ書房、2017年）に触れておく。「語り論」や「読者論」など、文学テクストを読むための26の切り口について、それが用いられるようになった経緯や、その歴史的検証と今後の展望が分かりやすく整理されている。約半世紀にわたる近代文学研究の歴史のなかで、これまで何が、どのように問題にされてきたか（逆に、何がネグレクトされてきたか）が概観でき、他領域の研究者にとっても格好のハンドブックである。

ところで、前掲書で「カルチュラル・スタディーズ」の項目を担当した瀬崎圭二が指摘するように、90年代末以降に現れた日本近代文学の「文化研究」が、当初の問題意識を徐々に薄めて、現状では「単に同時代の資料を参照しつつ文学テクストを解読するオーソドックスな方法として定着してしまったきらい」は否めない。前回の動向で原が指摘した、「同時代言説を参照し」、「作品のアクチュアリティを問う」「共時態研究の流行」も、おそらく同様の事態を指しているが、こうした”保守的”な動向は、若手研究者の研究環境を取り巻く制度的な諸問題が解決されないかぎり、しばらく続くのではないか。

そうしたなか、2017年10月の日本近代文学会秋季大会（於・愛知淑徳大学）で、言語学の成果を自らの物語論構築に積極的に導入してきた会員の中村三春と西田谷洋に加え、言語学から物語論にアプローチする浜田秀と橋本陽介をゲストに迎えたパネル発表「文学研究と言語研究のインターフェイス」が行われたことは特記しておきたい。あいにく校務のため出席できなかったが、四人の議論がどのように噛み合い、また、噛み合わなかったのか。今回の試みは、文学研究と言語研究の接合面を探るうえで、今後大きなメルクマールとなろう。

なお、上記パネルの登壇者である西田谷洋は、先日『村上春樹のフィクション』（ひつじ書房、2017年）を刊行した。とりわけ、表現細部の語彙やレトリックと物語全体の構成との関係を検討する「Ⅰ　修辞的構成」や、認知物語論の理論モデルをふまえ、物語がいかに提示されるかを検討する「Ⅱ　幻想の物語」の議論は、西田谷による言語研究との長年の対話の成果と言える。

いっぽう、言語研究の側から小説テクストの表現特性を明らかにしようとした試みに、石出靖雄『漱石テクストを対象とした語り言語の研究―『三四郎』『道草』を中心に』（明治書院、2016年）がある。三人称小説の地の文を、語り手が聞き手に対して語る言語表現と捉え、「語りの様相」に力点を置くその分析手法は、これまでジュネットの「焦点化」論を参照枠としてきた文学研究に一石を投じるものである。

（共立女子大学）